

令和 6 年度 厚生労働科学研究費補助金(エイズ対策政策研究事業)

総括研究報告書

HIV 陽性者に対する精神・心理的支援方策の開発、及び HIV 医療と精神科医療の 連携体制構築に資する研究(24HB0701)

研究代表者 池田 学 大阪大学大学院医学系研究科精神医学・教授

研究分担者 白阪 琢磨 大阪医療センターHIV/AIDS 先端医療開発センター・特別顧問

橋本 衛 近畿大学医学部精神神経科学教室・主任教授

金井 講治 大阪大学・キャンパスライフ健康支援・相談センター
保健管理部門・講師

A. 研究目的

HIV 感染症は、抗 HIV 薬の多剤併用療法によって慢性疾患と捉えられるまでに治療効果が得られるようになった。その一方で HIV 陽性者の高齢化が進み、HIV 関連神経認知障害(HIV-associated neurocognitive disorder; HAND)だけではなく、認知症による認知機能障害を有する患者の増加が問題となりつつある。また HIV 陽性者では多様な心理的問題や精神症状が生じている場合も多いことが指摘されている。HIV 陽性者の精神症状に対する診療はエイズ拠点病院に一極化している傾向にあるが、治療対象はうつ病や適応障害、不眠などが多く、一般精神科において対応可能な症状がほとんどである。したがって、エイズ診療拠点病院の負担軽減と HIV 陽性者の精神症状に対して、より専門的な精神・心理的支援を提供するためには、HIV 陽性者の身体科主治医(かかりつけ医)と地域の精神科医療領域の専門職が連携する診療体制の構築が必要不可欠である。

前回の研究班では、大阪エリアで『HIV 陽性者の身体科主治医と精神科医療関係者相互の診療・相談体制の連携・構築』を目指して研究を推進し、精神科医療の専門職がこの連携に積極的に関与できるよう HIV に関する系統的な知識の獲得を促進するマニュアルや研修教材を作成した(HIV/AIDS 診療精神科ハンドブック: <https://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/psy/news/407edf95f8cd1994b2c6329537f918d4e499f9e3.pdf>; HIV 陽性者に関わる精神科

メディカルスタッフ支援ハンドブック: <https://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/psy/news/c034d553d9475869375ed701727ba0c5f21d1cb0.pdf>)。

本研究では、前回の研究課題を拡大し、全国レベルで HIV 陽性者の身体科主治医と精神科医療専門職相互の診療・相談体制の連携・構築を目指す。その際、東京や大阪などの大都市圏と地方都市との間で、患者ニーズや精神科医療機関の違いに着目し、連携や精神・心理的な支援方法を確立するための一助とする。最終的に、各分担研究者が開発した精神・心理的支援方法を用いてモデル地域で介入を試みる。

初年度(令和 6 年度)における各研究班の研究概要および研究目的は以下の通りである。

統括(池田): 全国のエイズ診療拠点病院の身体科医(感染症内科医・内科医)に対して精神科医療機関との連携に関するアンケート調査を行い、全国の精神科連携の実態やニーズを明らかにすることを目的とする。

研究 1(白阪): 精神疾患に罹患している HIV 陽性者が必要としている支援を明らかにする。

研究 2(橋本): HIV 陽性高齢者における HAND ならびに認知症の実態を明らかにする。

研究 3(金井): 本研究は、若年 HIV 陽性者(Young People Living with HIV: YLHIV)の心理社会的課題に関する国際的知見を体系的にレビューし、スティグマ、社会的孤立・孤独、精神的健康の 3 点に焦

点を当て、今後の支援の方向性を示すことを目的とした。

B. 研究方法

統括(池田): 全国のエイズ診療拠点病院の身体科医に対して、Web アンケート調査を行った。Web アンケートの URL を QRコード化し貼り付けたアンケート調査依頼票を各施設に郵送した。調査内容は、勤務地等の基本情報、自施設の精神科併設の有無、精神科連携における困難の有無とその理由、精神科連携の実績等であった。

研究 1(白阪): 大阪医療センター感染症内科通院中の HIV 陽性者のうち、院内外の精神科に通院中の 100 名を対象に、無記名・自記式の質問紙を配布、郵送で回収する。

研究 2(橋本): 国立病院機構大阪医療センターに通院中の 60 歳以上の HIV 陽性高齢者のうち、一次調査(スクリーニング検査)において認知機能低下が疑われた高齢者 27 名に対して、詳細な認知機能検査、MRI 検査、認知症専門医による診察(二次調査)を実施する。

研究 3(金井): 海外における YLHIV に関する文献レビューを行い、スティグマ、社会的孤立・孤独、精神的健康との関連について調査した。調査結果を基に、日本における若年 HIV 陽性者の調査に適切な質問項目を検討した。

(倫理面への配慮)

統括(池田): 大阪大学医学部附属病院倫理審査委員会より承認を得た(承認番号 24397)。

研究 1(白阪): 大阪医療センターの倫理委員会に相当する受託研究審査委員会の承認を得た(整理番号 25006)。

研究 2(橋本): 近畿大学医学部倫理委員会の承認を得た。また全ての対象者から、書面により同意を得た(受付番号 R05-067)。

研究 3(金井): 既存の文献のレビューであるため、倫理的な配慮は必要としない。

C. 研究結果

統括(池田): 身体科医 115 名から回答を得られ、有効回答数は 107 名であった。全国のエイズ診療拠点病院の感染症内科医・内科医の 45.8%が、HIV 陽性者を精神科に紹介することや、精神科の受診・通

院継続を促すことに困難を感じていることが明らかとなった。その主な理由としては、HIV 陽性者が精神科受診に対して拒否的であるといった患者側の要因(63.3%)、精神科に対する信頼感や連携経験の希薄さなどの医療側の要因(36.6%)が挙げられた。一方、困難さを感じない理由としては、約 7 割の回答者が精神科に対する信頼感や連携関係がすでに構築されていることを挙げていた。

研究 1(白阪): 今年度は精神科を受診している HIV 陽性者の援助ニーズに関する質問紙の構成を行い、院内の倫理委員会の承認を得られたため、次年度に調査の実施および結果の解析を行う。

研究 2(橋本): 22 名の対象者から二次調査への同意が得られた。14 名に対して認知機能検査を実施し、5 名に対して認知症専門医による評価を実施した。5 名中 2 名は正常範囲内で、残りの 3 名で認知機能低下を認め、診断はすべて非健忘型 MCI であった。また認知機能低下を認めた 2 名で振戦を伴っていた。

研究 3(金井): YLHIV は社会的孤立・孤独のリスクが高く、服薬アドヒアランス低下や精神的不調と関連する。また、性的指向や貧困などとの交差的スティグマも精神的健康に影響を及ぼす YLHIV の精神的健康問題は、多岐にわたり、その有病率は同世代と比べて著しく高い。

D. 考察

統括(池田): 約半分の医師が、HIV 陽性者の精神科受診や受診継続に困難を感じる背景には、患者の精神科受診への拒否感や消極的態度や精神科連携の経験不足が関与していると示唆された。日頃の精神科との連携経験が困難さの軽減に寄与しており、今後、患者の偏見解消に向けた啓発や、感染症内科と精神科の連携体制の強化が重要であると考えられた。

研究 1(白阪): 考察は次年度に行う。

研究 2(橋本): HIV 陽性高齢者では、非健忘型 MCI を呈しやすい可能性が示唆された。また振戦などの運動障害を伴いやすい可能性が示唆された。

研究 3(金井): YLHIV 特有の脆弱性として発達段階における課題があり、精神的健康悪化への経路としてスティグマ、孤立、サポートの相互作用が考えられる。また現行のソーシャルサポートシステムのギャ

ップとニーズを認める。

E. 自己評価

1) 達成度について

統括(池田):概ね順調に達成できている。

研究 1(白阪):当初の予定よりもやや進捗は遅れているが、今年度中に倫理委員会の承認が得られたため、次年度には調査の実施および結果の分析が可能である。

研究 2(橋本):倫理委員会の承認が遅れたため、調査の進捗が当初の予定よりも遅れている。次年度中に全例の調査を終了する見通しである。

研究 3(金井):当初の予定通り達成している。

2) 研究成果の学術的・国際的・社会的意義について

統括(池田):全国のエイズ拠点病院を対象とした精神科連携に関する詳細な調査はこれまで実施されておらず、本調査によってエイズ診療拠点病院の負担軽減およびHIV陽性者の精神科受診の促進を目指した解決策を検討できる。また、本調査では、最終的には大都市と地方都市といった地域の特性に応じた身体科-精神科の連携体制構築に繋がる基礎的資料を得ることができ、社会的意義があると考ええる。

研究 1(白阪):介入の重要性が指摘されている精神疾患を併発するHIV陽性者の援助ニーズを詳細に検討する本研究は、十分な臨床的・学術的意義を有すると考える。

研究 2(橋本):本研究により高齢 HIV 患者の認知機能の状態が明らかになることにより、今後増加する高齢 HIV 患者のマネジメント方法の進歩に大いに寄与すると考えられる。

研究 3(金井):若年 HIV 陽性者(YLHIV、概ね 15～30 歳)が、社会的孤立・孤独感(SIL)、多様な形態のスティグマ(顕在的、予期的、内在化)、そして高い有病率の精神的健康問題(うつ病、不安、自殺念慮など)という、深刻な心理社会的課題に直面していることを明らかにしたことは社会的に重要である。

3) 今後の展望について

統括(池田):本調査の分析を進める。加えて、令和 7 年度は、前回の研究班で作成した研修資料に、本調査結果を加味し、全国の精神科医療従事者に対する HIV 研修会を実施する。

研究 1(白阪):本研究の結果を学会や研修を通して広く発信することで、全国の拠点病院および精神科診療施設における医療体制の整備に資すると考える。研究成果は研究班内で共有し、有機的な展開を行う。

研究 2(橋本):研究成果を学会発表、論文化するとともに、HIV 患者の診療に携わる専門医や認知症診療に携わる医師が活用可能な資料開発や、研修会の企画・実施に役立てていく。

研究 3(金井):大阪医療センター外来通院中の HIV 陽性者 200 名を対象に、自記式質問紙調査を行い、スティグマ・社会的孤立・孤独・精神的健康等を評価することで、本邦の実体に関する基礎的資料を得る。

F. 結論

統括(池田):本調査により、エイズ診療拠点病院の感染症内科医・内科医の約半数が、HIV 陽性者の精神科紹介や受診継続支援に困難を感じていることが明らかとなった。主な要因は、患者の精神科受診への拒否感や連携経験の不足であった。今後は、啓発活動の推進、受け入れ可能な精神科医療機関の情報提供、精神科医療スタッフの育成、そして感染症内科と精神科の連携体制の強化が重要である。

研究 1(白阪):次年度には精神疾患に罹患している HIV 陽性者が必要としている支援を明らかにし、適切な精神医療および心理社会的支援を提供できるように医療体制を整えるための知見を得る。

研究 2(橋本):高齢 HIV 陽性患者の認知機能障害の実態調査を開始し、5 名の対象者の調査が終了した。HIV 陽性高齢者では、非健忘型 MCI を呈しやすい可能性が示唆された。また振戦などの運動障害を伴いやすい可能性も示唆された。

研究 3(金井):本文献レビューは、若年 HIV 陽性者(YLHIV、概ね 15～30 歳)が、社会的孤立・孤独感(SIL)、多様な形態のスティグマ(顕在的、予期的、内在化)、そして高い有病率の精神的健康問題(うつ病、不安、自殺念慮など)という、深刻な心理社会的課題に直面していることを明らかにした。

G. 知的所有権の出願・取得状況(予定を含む) なし